

昭和55年2月1日 第3種郵便物認可  
平成29年10月1日発行（毎月一回）日発行  
俳句雑誌 沖 第29巻第10号



俳句雑誌[おき]

10  
月号

沖  
發行所

# ルネッサンスの地

能村 研三

## ドイツ・イタリあの旅

八月、市川市とバートナーンシテイの関係にあるドイツ、バイエルン州ローゼンハイムに行った。一昨年も「ビール祭」といわれる「秋祭」に招かれたので、今度は二度目の訪問となった。

ミュンヘン空港に降り立つと、早速バイエルンの民族衣装と音楽演奏で歓迎してくれた。

今回は、旅行というより交流、視察が目的であったので、現地では交流をさらに深める盟約書のサインや市川から同じ時期に行っている中学生たちのサッカーの親善試合などを観戦する公式行事が続いたが、ローゼンハイムは、ミュンヘンからオーストリアに近い緑豊かな静かで心休まる町である。

また、今回はローゼンハイムから列車を利用して、イタリアのポローニャとフイレンツェへも旅をした。

ポローニャは作家の井上ひさし氏から「ポローニャ紀行」という本をいただき、是非行ってみたいところだった。現在、井上ひさし氏が日本で提唱している子供の読書運動「読みっこ運動」の発祥の地でもありその仕組みづくりにも興味があった。

ポローニャは石造りの重厚な街で古い建物を保全し、美術館、図書館、博物館、劇場などとして活用している。映画や演劇などの文化活動も盛んである。

またポローニャは「職工の町」と

ルネッサンス志の地秋澄めり

爽涼や父は未踏のフイレンツェへ

祭壇画つぶさに見たり堂涼し

フイレンツェに天才敵手カンナ燃ゆ

街四囲は煉瓦色屋根秋の色

メデイチ家の彫刻廊の秋日ざし

ヴェツキオの橋上店舗夕涼し

ポローニヤ

秋灯に映える柱廊彷徨へり

柱廊の下のカフェや涼新た

馬通す緩ききざはし秋気満つ

も言われているが、旧レンガ工場を活用して、中世から現代までの産業を展示した産業博物館も見学した。たくさんある歴史的な建物もただ保存するのではなく図書館に活用したり、その工夫のすばらしさにも感心した。

次に訪れたのがフィレンツェ。ここはルネッサンス発祥の地、また「花の都」の名でも知られる。歴史的建造物や美術館はもちろん、街角のふとした光景からも、芸術の香が漂ってくる。

中でも、「ウフィッツィ美術館」はメデイチ家歴代の美術コレクションを収蔵する美術館で、イタリオルネッサンス絵画の宝庫。有名なボッティチエッリの「ザイナスの誕生」などもみることが出来た。

今回の旅は、田園風のドイツのローゼンハイムとイタリアの都会的なポローニヤ、フィレンツェというヨーロッパの都市の二面性を比較できたのが面白かった。

能村 研三



# 秋声

林翔

号泣

四十二歳で世を去った福永耕二氏のことを忘れはしないが、改めて思い出したのは、沖会員鳥居秀雄氏が鹿兒島で耕二の墓に詣で、かごしま近代文学館での「福永耕二展」を覽て来たとして、展覧会の資料その他を届けて下さったことによる。

耕二氏は二十歳で「馬酔木」の巻頭を得、二十代で馬酔木同人に列した天才俳人。能村登四郎氏も耕二に注目し、九州旅行の折り、予め連絡しておいて耕二に会い、上京を勧めた。市川学園が学級増加の予定であることを知っていた登四郎は学園の古賀米吉校長の諒承を得ておいて、市川学園に勤めることを勧めたのである。水原秋櫻子に憧れていた耕二は上京して秋櫻子に親炙することを夢見ていたから喜んで承諾し、昭和40年度から市川学園（高・中）教諭となり、千葉市に居を定めた。こうして市川学園国語科には能村・林・福永の三俳人が揃うことになった。昼休みには何時も三人で談笑しているのを、他教科の教師が嫉ましそう

台風は近づく蟬は鳴きつづく

抜け羽根の濡れて鮮か台風過

水消しの煙草にかすか秋の声

秋をうたふ蟬の愛しさ人も亦

秋 蝉 は 声 絶 え 耳 は 鳴 り 止 ま ぬ

い や 果 て の 朝 顔 や 紺 し た た ら せ

秋 霖 や ほ と ほ と 黒 き 森 の 色

農 老 い ぬ 小 菊 め ぐ ら す 畑 の 縁

水害ニュース

テ レ ビ よ り 溢 れ 出 で む と 秋 出 水

八月三十一日

秋 雨 や テ レ ビ 画 面 に 波 郷 兄

に見詰めることもあった。

昭和45年「沖」創刊。耕二は「馬酔木」同人を兼ねて「沖」同人ともなった。「沖」に貢献すること10年、昭和55年12月4日に耕二は世を去った。永眠の日とも知らず私は病院に二度目のお見舞に来ていた。「危篤」とのことに、病室に入れたのは家族だけ。待合室で心配していたが、やがて「逝去」の報。更に暫くして病室に入ること許され、死に顔との最後の対面になってしまった。唇を噛みしめたが、病院では泣けなかった。帰りの電車の中でも泣けない。市川大野駅で電車を降り、家に向かう途中のやや広い空地。そこで初めて私は声をあげて泣いたのであった。

林 翔



# 蒼茫集



小さき秋

酒本八重

どこか疲れて八月の野の猛々し  
道の駅土地の小さき秋を売る  
腰掛のつもりが生業星月夜  
瑠璃とかげ金精様へ走りけり  
山蟻が畳を這うて在所寺  
簾戸立てて小泉八雲のはなしなど

江戸切子

辻直美

熱帯夜寝ることにすこし力要る  
江戸切子冷酒を藍に染むるかな  
蛸籠ひとり住むには広かりき  
そこまでの其処遠かりし夏の星  
夜風来るさんさ踊りの笛太鼓  
喪ごころを焼くや舟つこ流しの火

睡魔

千田敬

壺壺にわが魂独りあそびして  
ぐい呑の火襷めでて初秋刀魚  
睡魔まで吾を見捨つる熱帯夜  
焼鮎の眼と目を合はせ喰ふ男  
身に入むや波郷の朱筆いと細か  
鳴翔伊藤白潮先生逝くちて野辺の起伏は利休いろ

明日秋へ

北川英子

をみな子の片袂噛む金魚掬ひ  
ダリの絵の時計ぐにやりと熱帯夜  
五時間目の保健室混むのうぜん花  
矢面に立つてしまへば涼しかり  
明日秋へ日は赤あかと沈むかな  
今朝秋の海の深いるみをつくし

空 蟬 森岡 正作

潔く浴びて帰れり大夕立  
大きき宙に突き出し三尺寝  
脳天に受く滴りの二つ三つ  
心太一句するりと逃しけり  
原爆忌底なき闇にねまりをり  
空蟬にふうと命を吹き込みり

波の形 田所節子

涼やかや波の形の湯葉刺身  
箸置は涼しき艶の籤細工  
デパートのまん中割つて作り  
雷神の荒息か風出でにけり  
シャワー浴び私を主婦に切り替ふる  
炎帝へ旒のごと干す岩田帯

浮子・毛鉤 成宮紀代子

音羽山の御殿に匂ふ蚊遣香  
明日夫はCTスキャン冬瓜汁

秋興や竿師の技の浮子・毛鉤  
あの夏の焦土捕へし二眼レフ  
苦瓜を挽ぐ恐竜の肌ざはり  
ビル越しに見る半分の大花火

旅のごとくに 辻美奈子

旅のごとくに白靴の紐むすぶ  
白桃の香の傷つきしところより  
てんとむしだましと言はれても困る  
その日より遺族てふ名の夏帽子  
あさがほの歳月すこし巻き戻す  
父方の癖つ毛花火見てをりぬ

白 渚 渡辺 昭

風鈴によき風賜ひ供養茶事  
水漉してつかひし母よ金魚玉  
鉈傷の一痕幹に黒揚羽  
声にして雄々しき師の匂風涼し  
火を熾す土間より盆の白渚  
塔裏の風の冥加を白日傘

# 潮鳴集



下ろすに力

林 昭太郎

水を打つ水の地球の一隅に  
バーベルを下ろすに力原爆忌  
炎昼の道あるばかり道路鏡  
すぐそこを江ノ電が過ぐ釣忍  
水に浮くもの寄りやすし晩夏光

二 音 古屋 元

納豆に朝日も混ぜてバンガロー  
夏星のかけらが一個児のリュック  
一本の芯の高層炎天下  
医師確と告げたる二音青葡萄  
ベッドごとに男坐れり明易し

夏たたむ

小嶋 洋子

バグパイプの音のしさうな雲の峰  
七月の炊飯器にもある水位  
灼くる街ガムシロップの濃き透明  
たれかれを親しく思ふ祭笛  
テント畳む巨大折紙めけるかな

和 竿 大沢美智子

紅殻の軒に風あり鬼灯市  
線香花火の三分間を子等寡黙  
枝極む砂町吟行二句和竿 百本涼新た  
遠き日の波郷白花さるすべり  
水羊羹つるりと今宵京泊り



# 沖作品



## 能村研三選

東京 齊藤 實

海鞘食べて夕日の色の濃かりけり  
蚊帳の中鉄腕アトムと寝てゐたり  
夜濯の隙だらけなる柔道着  
氷室口去年を覗く瞬時かな  
あめんぼに水の笑窪の生まれをり  
八月の水八月の蛇口より  
夏の月引越しといふ旅じたく  
がらがらのスターバックス終戦日  
百日紅身籠るといふさびしさよ  
桃の實の熟しはじめてゐる重み  
水榭の森の明るき袋角  
賛成の数を集めて向日葵咲く  
寝坊許さぬみんみん蟬の高音かな  
星屑を包む花かもからすうり  
マンシヨンは光の小函夜の秋

長崎 小林 奈穂

市川 諸岡 和子

北海道 梶川智恵子

髪乾くまでをそぞろに夜の秋  
海霧ふかし指呼の千鳥を奪ひけり  
掌に抗すうるし光りの海胆の棘  
売り声は運河の風に玻璃風鈴  
墓洗ふ水とくとくと吸はせては  
ペランダへ椅子持ち寄りて遠花火  
洞へ入る鳥の尾長し樟若葉  
緑さすバターナイフの木の匂  
切り抜きのファイルふくらむ新樹の夜  
秋めくや時刻表より早いバス  
想ひ堂々巡りして大暑かな  
我が影の薄くなりしや夏の果  
別人の顔持ちて来る今朝の秋  
新涼に押されてけふの始まりぬ  
発語するも母音ばかりの酷暑かな

東京 五十嵐章子

神奈川 菅原 健一

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

夜濯の隙だらけなる柔道着 齊藤 實

先日の北京オリンピックではテレビで柔道着を観る機会が多  
くあった。昔は白一色であったが、最近の国際大会では対戦相  
手を色で識別するため、青色の柔道着もすっかり馴染みになっ  
た。柔道着は生地がごわごわで、洗うのも一苦労ですっしり重  
く干すのも大変だそうだ。この句は夜空に干された柔道着を「隙  
だらけ」と表現した。柔道の試合に隙は禁物。もしかしたら昼  
間の試合、隙を見せて惨敗してしまったのかも知れない。

八月の水 八月の蛇口より 小林 奈穂

この句のリズムの下敷きになっているのが飯田龍太の「二月

の川一月の谷の中」であることはだれもが知っているだろう。  
「一月の川」と「二月の谷」を対句のように並べたように、こ  
の句は「八月の水」と「八月の蛇口」と対句として表現した。  
飯田龍太という大御所の句に倣う大胆さにも感心した。特に炎  
暑野外にいるときは、水分補給が肝心で、公園の水飲み場の蛇  
口から出てくる冷たい水の旨さはほっとさせてくれる。あえて  
「八月」を二回使うリフレインも、リズムがあって成功させた  
一因である。

賛成の数を集めて向日葵咲く 諸岡 和子

真夏に咲く向日葵が一杯花をつけている畑。近年は鑑賞用と  
して畑にまとめて植えられて人々を楽しませてくれる。向日葵  
は太陽を追って花がまわるといふ俗説があるが、実際は動かな  
い。しかし群れ咲く向日葵を見ていると同じ向きで咲いている  
事に気づく。この句は向日葵を擬人化した句だが同じ向きを向  
いていることから太陽に対して皆賛成の意を唱えているかのよ  
うである。発想が大胆でおもしろい。

海霧ふかし指呼の千島を奪ひけり 梶川智恵子

海霧を「じり」と言うのは北海道の方言だそうだ。作者は北  
海道の方だから戦後ロシアの管理下に置かれている千島列島の  
島々に対する思いは深い。海霧は夏海上を吹き渡った湿った空  
気が寒流や冷水域で冷やされでける濃霧をいう。晴れている時  
はよく見える国後、択捉の島々も海霧にすっぽり隠れて見えな  
い。そのもどかしさが戦後島を奪われてしまった悔しさにもつ  
ながった。(以下略)